

美濃加茂市文教民生常任委員会

行政視察報告書

期間 令和8年 7月3日(金) 本巣市 根尾学園 本巣市役所

令和8年 7月10日(金) 岐阜市 藍東学園

参加委員 瀬瀬源太(委員長)

田口智子(副委員長)

金井文敏 7月3日 午後の視察は所要の為欠席

岸一夫

高井実枝

柘植宏一 7月10日 所要の為午後から欠席

村瀬正樹 7月10日 体調不良の為欠席

渡辺孝男

視察先 7月 3日(金) 本巣市 根尾学園 本巣市役所

7月10日(金) 岐阜市 藍東学園

視察目的 小中一貫校について

新庁舎建設にあたって

根尾学園視察報告書

<目的>

小中一貫校における具体的な取組の中から、教育現場が抱える問題の解決に向け、自校でも導入・実施できるヒントがないかを学ぶ。

<背景・課題>

全国的に人口減少や学校の維持負担の軽減を目指し、児童生徒により良い教育環境を整える目的で小中一貫校の設置が進んでいます。

美濃加茂市において人口減少は顕在化していませんが、その要因は外国籍児童数の増加による影響が大きく、過疎地域とは異なる問題を抱えています。そのため、これまで小中一貫校の設置に関する議論は具体化していません。しかし、本市の小中学校を取り巻く現状には、いじめや不登校、多文化共生や言葉の壁など、解決すべき課題が山積しています。こうした教育現場の諸課題に対して、小中一貫教育の取組の中に、本市における問題解決のヒントや、新たなアプローチの手法がないかを学ぶ必要があります。

<視察の目的>

- ① 先行事例である根尾学園の小中一貫校における具体的な取り組みと成果の把握
- ② 美濃加茂市が抱える教育・社会課題に対する解決のヒントの獲得
- ③ 本市において将来的に応用・実施可能な施策の可能性についての検討

<視察概要>

・ 教育現場を取り巻く現状と危機感

教員不足や児童の不登校、自殺率の増加など、教育現場を巡る課題は依然として深刻であり、根本的な環境改善には至っていません。学校卒業後も続く子どもたちの人生を見据え、「一人ひとりが健康に生きていくための基盤」を培うことが教育の原点であると考えます。

・ 本巣市における重点的な取り組み

教育現場において、子どもの命と健康の土台となる「食事・睡眠・運動」の環境整備に注力しています。また、教育活動のあらゆる場面において、「何のために取り組むのか」「何を目指すのか」という目的意識を常に明確にすることを意識しています。

- ・ **取り組みによる顕著な成果**

こうした教育長の確固たる方針と実践により、本巢市の児童生徒は、学力および運動能力の双方において、岐阜県内および全国平均を大きく上回る目覚ましい成果(発達・向上)を残しています。

具体的な取り組みの一例

幼保小中の「切れ目のない支援体制」の構築

教育委員会の所管は原則として小学生以降となりますが、本巢市では未就学児が通う保育園・幼稚園の環境整備から一体的に着手しています。園と小・中学校の教職員による合同会議を定例化して詳細な情報を共有することで、小学校入学後も「切れ目のない支援」を継続し、児童が安心して就学できる環境を整えています。

健康な心体を育む教育現場の実践

食育の推進:定期的な地産地消メニューの提供により、食への関心と郷土愛を醸成しています。

運動機能の向上:例えば「カゴを上配置せず、前方に投げる玉入れ」など、ルールを工夫して外遊びや散歩を推奨しています。児童が主体的に楽しみながら運動機能を高められる環境が、教育現場にしっかりと具現化されていました。

根尾学園教育目標

ふるさとを愛し、仲間と共に未来を切り拓き

たくましく生き抜く児童生徒 ～自立・共生・創造～

ステージ制による連続的な学び

「初等部(1～4年)」「中等部(5・6年)」「高等部(7～9年)」の区分を採用しています。異年齢での共同生活を基盤としつつ、学年別の授業運営を行うことで、「一人ひとりが輝き誇りを持てる学びとくらし」を実践しています。変化の激しい未来に向けて、地域や自身の未来を切り拓く「粘り強く学び続ける力」の育成に注力しています。

授業見学における所見

実際の授業風景では、児童生徒および教員の表情が非常に穏やかであり、教壇からの「一方通行」ではない、双方向の対話が成立した授業が展開されていました。児童生徒が終始主体的に、かつ楽しそうに学んでいる姿が印象的でした。

<まとめ>

教育活動における目的意識の重要性

「今と未来を幸せに生きる」をテーマに、正解のない問題に対して自分らしく立ち向かい、自らの人生を切り拓いていく児童生徒を育成するためには、「何のためにこの教育活動に取り組んでいるのか」という本質的な目的を常に問い続ける姿勢が重要です。

義務教育が抱える構造的課題へのアプローチ

幼少期(未就学期)に培われた多様な能力や主体性を、小学校・中学校という枠組み(型)に一律に当てはめようとする学校教育のあり方にこそ課題があり、それが結果として「小1 プロブレム」や「中1 ギャップ」をはじめとする諸課題の要因となっています。これらを解決するには、

子どもの声に真摯に耳を傾け、共通のゴールを共有しながら「共に考える教育」への転換が必要です。

視察の結論(子どものために大人がすべきこと)

子どものために大人(教職員・地域・行政)にしかできないこととは、一言で言えば「子どものために大人が真剣に考え抜き、学校側の改革として、子どもたちの実態に合わせた『楽しく主体的になれる授業』の工夫を徹底すること」に他なりません。今回の視察では、その熱意と実践が児童生徒の確かな成果を出している現場を、目の当たりにすることができました。

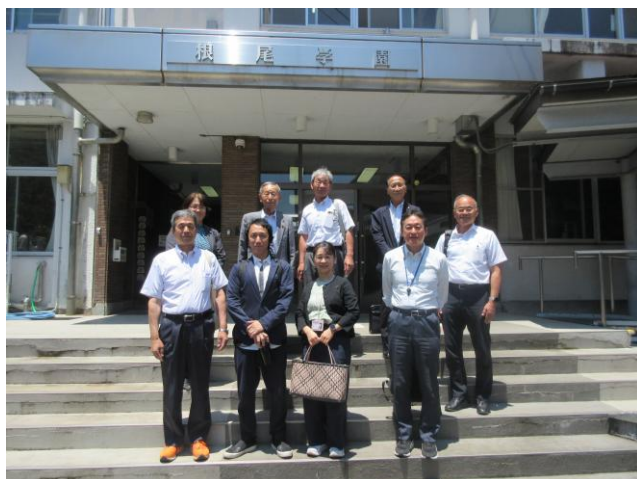
<個人的な感想>

・「同学年」という枠組みへの再考と異年齢交流の意義

人生において同年齢の集団のみで過ごす期間は、義務教育期間(あるいは学生時代)が大部分を占め、社会に出た後は「同学年」という枠組みは存在しなくなります。教育現場において、児童生徒を中心に据えて考えるならば、同年齢のみの集団に固執する必要性は低く、むしろ「異年齢の集団」であるからこそ、互いに助け合い、自身の居場所や役割を見出しやすくなるというメリットを強く実感しました。

・大人(教育側)の姿勢の変革

何かに直面した際、子どもたちは「自分にできること」を主体的に探すのに対し、私たち大人は「できない理由」を先行して探してしまう傾向にあります。教育現場の改革を進めるためには、まずは大人がその姿勢を省みる必要があります。



本巢市役所視察報告書

<視察の目的>

美濃加茂市において新庁舎建設の計画を進めるにあたり、令和４年９月の着工を経て新庁舎を開庁した先行事例である本巢市を視察した。実際に完成した庁舎を見学し、今後の本市新庁舎における「庁舎の役割」および「求められる機能」のあり方について学ぶことを目的とする。

<視察概要>

財政面における実態

昨今の物価・資材高騰の影響を受け、当初の建設予算(想定約４０億円)から最終的には約５０億円規模に膨らんだものの、徹底したコスト管理のもとで完成。

「最小限の機能」への徹底と市長方針

市民の交流スペースは正面玄関横の「ホール」として開放的な空間を設けているが、独立した個室(専用の部屋)としては確保していない。これは「庁舎建設にかける予算は最小限に抑え、職員の事務所としての

必要最低限の機能を備える一方で、浮いた財源は市民の福祉の充実に配分する」という、市長の明確な政治方針と指示に基づいた設計である。

<まとめ>

美濃加茂市の新庁舎計画においては、図書コーナーや市民交流スペースの確保・充実が検討されています。しかし、今回の視察を踏まえると、**「庁舎の本質は職員の効率的な執務・事務所スペースである」という原則に立ち返る必要があると考えます。**

限られた財源の中で、多目的で大規模な交流スペースを庁舎内に設けるのではなく、市民交流機能は庁舎とは別の適切な場所に切り離して整備していくことが、財政健全性と機能性の両面から望ましいと考えます。

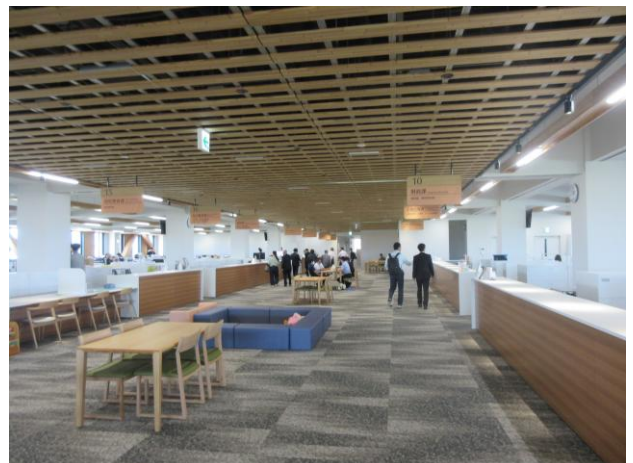
<個人的な感想>

市民交流スペースの運用における現場の課題について

現地職員との意見交換の中で、設計上は「市民交流スペース」と謳っていても、実際には混雑時の待合スペースとして機能している実態を確

認した。また、その一方で「図書館代わり」として長時間の滞在・利用をする市民も少なくなく、結果として「職員が常に市民の目に晒され、気が休まらない」という、運用面・メンタル面での現場の負担や課題が生じているという生の声を聞くことができました。

新庁舎の設計段階では、市民向けの利便性や華やかさに目が向きがちですが、そこで毎日働く職員の勤務環境（食事や休憩スペースの確実な確保）を最優先で整備することこそが、中長期的に質の高い行政サービスを市民へ還元するために不可欠であると強く実感しました。



藍東学園視察報告書

<目的>

岐阜県内において今年度より小中一貫校として開校。最新の取り組みを見学し、教育現場における問題解決のヒントについて、美濃加茂市の教育現場において取り組めることは無いかを学ぶ。

<背景・課題> 根尾学園と同じ

<視察の目的> 根尾学園と同じ

<視察概要>

学校の教育目標:『だれもが幸せになる学校』～共生・自律・創造～

共生:年齢、考え方、得意・不得意などの「違い」があるからこそ学び合える環境を作り、人と共に生きる力を育てる。

自律:「言われたからやる」から「自分で考えて動く」への転換を促し、自身の学びと行動に責任を持つ力を育てる。

創造:正解のある問題だけでなく、答えのない問いに挑戦し、新しい価値を生み出す「未来を切り拓く力」を育てる。(正解を教える学校から、自分の答えを生み出す学校への転換)

3つのコミュニティが交差する「小さな社会」の構築

異年齢で支え合う場【ファミリー】(安心と繋がりを育む)

自由時間、ファミリー給食、清掃などを通じ、互いの価値を認め合う人間性を育む。「これ面白そう」といった「共通の関心」から異年齢が一緒に関わり時間を共有する。

同学年で思考を磨く場【クラス】(学びを深める)

教科の特性に合わせた環境で学ぶ「教科センター方式(教科ラボ)」や、発達段階に応じた資質・能力を磨くクラス給食などを実践する。学び方の違いを個性と捉え、自立した学びを育てる。

- ・ 地域と生きる学びの場【ハートメイツ】(社会と繋がる)

スクールコミュニティやコミュニティ・スクールを舞台に、多様な大人(ハートメイツ)と共に学ぶことで、学校での経験を社会で生きて働く力まで高める。

<まとめ>

美濃加茂市の教育現場でもタブレット端末の活用をはじめとする新たなICTシステムが導入されています。しかし、今回の視察で目にした児童生徒の「自主性」や「協調性」は、小中一貫校の環境下にある子どもの方が明らかに高く育まれている印象を受けました。

開校からわずか数ヶ月という短期間でここまでの成果が出ている要因について、「少人数制による教員の心理的・時間的ゆとり」が関係しているか等、一度の視察で完全に検証することは困難です。しかし、前週に視察した根尾学園の児童生徒にも全く共通する高い自主性が見られたことから、「9年間の連続性」と「異年齢交流・対話型授業の定着」の双方が、子どもの成長に大きく寄与しているものと推察されます。

<個人的な感想>

学年を超えた小さな社会の中で、「2年生以上は誰でも兄・姉になれ、8年生以下は誰でも弟・妹になれる」という柔軟な役割関係が自然に育まれていました。実際の授業風景も、全員が前を向いて着席する従来型ではなく、非常に自由で開放的な空間が広がっていました。一方で、この自由度の高さに対し、「基礎学力の維持が担保できるのか？」という保護者側の不安をいかに解消していくかという点は、今後の課題になり得ると感じました。

特筆すべき点として、視察した小中一貫校(根尾学園・藍東学園)に共通して「学校に通えない不登校児童生徒がほぼ存在しない」という事実が挙げられます。この実績だけでも、現代の教育界・社会が抱える課題がクリアされていると言えます。

見学時には、生徒自らが立候補してアテンド(案内)を担当してくれました。各自がタブレット等で自作した説明書を活用しながら、生き生きとした表情でグループを誘導する姿からは、本物の自主性と協調性が育まれていることが明確に伝わってきました。美濃加茂市において同様の、あるいは可能な範囲での応用事例(試験的導入など)を検討したい

半面、前例のない新しい取り組みの導入は教育現場に一時的な混乱や教員の負担を生むことが予測されます。

しかし、「このままではいけない」という強い危機感を持ち、子どもの未来のために、まずは私たち大人が本気になって学校現場を変えていく姿勢を示すべきであると強く実感する視察となりました。